

Close-up

【広島県蒲刈町 柴崎 龍雄 町長】



地域の活性化をめざした、 ある小さな町の大きな決断

= 広島県蒲刈町・蒲刈町海洋センターの取り組み =

瀬戸内海に浮かぶ、大小7つの島で構成される広島県蒲刈町。いまから23年前、ここに43歳の若さで初当選した柴崎龍雄町長の思い悩む姿があった。

「町の将来を思えば、島の特産であるミカンばかりに頼ってもいけないと考えたのです」

新しい町づくりのために何をすべきか、そんな模索を続けるなかで柴崎町長は、美しい自然が残る島そのものが町の財産であることに気がついた。

「産業主体から生活重視へと時代が移り変わるなかで、島に残る自然は人々の心と体を癒すレクリエーションの拠点になり得ると思ったのです」

柴崎町長は、当時、広島県が計画していた「県民の浜」という、海水浴場を中心としたレクリエーション施設を誘致したうえで、さらに海洋センターの建設をB&G財団に申請。天体観察館や温泉施設、古代土器製塩法体験施設なども「県民の浜」に集約するかたちで建てていった。

「公共施設は、公平さを考えて各地域に分散されがちですが、相互に活用できる施設は同じ場所に集中させることで大きな効果を生むのです」

しかし、発想が大胆になれば立ちちはだかる壁も高くなる。いまでこそ県内外のレジャー客で賑わい、シーカヤックのメッカと呼ばれるほどに名を広めた蒲刈町ではあるが、「県民の浜」や海洋センターが誕生した陰には並々ならぬ努力が秘められていた。

豊かな自然は町の財産

海洋センター誘致のため東京のB & G財団本部を訪れた際、柴崎町長は宿泊先に飾られていた一枚の絵画に、ふと見入ってしまった。

「外国の風景だったと思いますが、ヨットに乗って楽しく遊ぶ人たちが描かれていたのです。蒲刈町でも、いつかこんな風景を見ることができたらいいなと、ついつい夢を膨らませてしまいました」

柴崎町長が初当選した昭和55年当時、日本は高度経済成長にひと区切りつけ、多くの人々が余暇の過ごし方に高い関心を寄せ始めていた。広島県が打ち出した「県民の海」構想も、こうした時代の変化に対応したものとして注目され、その拠点として考えられた「県民の浜」には、海水浴場を中心に他のスポーツ施設や宿泊施設を整えるという、総合レクリエーション基地としての性格が備えられていた。

蒲刈町は、昔からミカンの栽培で有名でしたが、いつまでもこれ1つに頼ってばかりもいられません。時代に即した何か新しい事業はないかと考えているうち、ここには穏やかで美しい海が広がっていることや、県鳥のアビが飛来する豊かな自然が残されていることに気づきました。いままでなら、工場を誘致するなど産業空間としての利用価値を考えたことと思いますが、これからの時代は生活空間としての役割が求められると思ったのです。特に、余暇活動の観点から見れば、島の自然は大きな財産になり得るのです。そんな矢先に『県民の浜』計画が持ち上がったので、ためらわずに手を挙げたというわけです」

誘致に動いた町や村は多数あり、蒲刈町は県民が多く住む都市部から離れているという地理的な条件もネックになっていたが、町長自らが語るほどに“涙ぐましい”誘致活動を展開。やっとの思いで同町に決定されるやいなや、B & G財団にも海洋センターの建設を申請した。

「海水浴場だけでなく、プールがあれば泳げる期間が長くなりますし、老若男女を問わず、いろいろな教室が展開できます。また、体育館があれば屋内スポーツができるし、艇庫があればカヌーやヨットも楽しめますから、実にたくさんのイベントを組むことが可能になります。海洋センター建設は、町が考えた『県民の浜』構想において、まさに最終事業でした」

一般に、体育館をある地域につくったら、運動場は別の地域にと、公共施設は地域間の公平さを考慮しながら分散して建てられることが多い。しかし、柴崎町長は、1カ所に集約してこそ相乗効果が得られるという信念で計画を進め、最初は冷ややかな目で見えていた町民の間からも、しだいに「町の将来を熱心に考えているようだから、あの若い町長を支えてやろうじゃないか」という声が高まっていった。

現在、「県民の浜」には海水浴場や海洋センターをはじめ、テニスコートやフィールドアスレチック、修学旅行客も収容できる研修・宿泊施設、温泉やキャンプ場、そして天体観測館や古代塩づくりの体験施設といった、さまざまな施設が隣接しており、その相乗効果によって、一般レジャーはもとより修学旅行や体験学習など、実に幅広い目的で多くの人々に利用されている。



【あらゆる施設が集められた蒲刈町の「県民の浜」。

家族連れのレジャーから修学旅行まで、さまざまなニーズに対応している】

最後の思いを町民へ託す

町民の支持を受けて、さらに自信をつけた柴崎町長の「県民の浜」構想。しかし、最終事業に位置付けた海洋センターの建設は、思いもよらぬところで大きな壁に当たってしまった。

「当時、なんと蒲刈町のほかにも広島県から3カ所の自治体が同時に海洋センター建設の申請を出していたのです。従来の流れからすると、一度に認められるのは、1つの県で1カ所か2カ所でしたから、これは大変だと思いました。しかも、3カ所のうち1カ所は近隣の町でしたから、もしここが認められたら、当分の間、蒲刈町には順番が回ってこないだろうと思いました」

さらに、良くない知らせが柴崎町長の耳に飛び込んだ。建設予定地をB & G財団が視察に訪れた際、そこがしっかり造成されていなければ申請が却下されるおそれがあるというのである。

「これには、参りました。申請はしたものの、建設はまだ先のことだと思って、予定地は山林のままだったからです。しかも、そこは県有地なので勝手に造成するわけにもいきませんでした」

なんとかして、視察までに造成しなければならない。土地に関しては、すぐに県が貸与を認めてくれたが、造成の認可や請け負い業者への公示などを整えている時間はなかった。

「もう、一か八かでした。『町が独断で造成するので、どうか見逃してほしい』と、県の担当者に頭を下げるしかありませんでした」

しかし、突然ブルドーザーが走り回るようになった建設予定地を見た業者から、「入札もしないで県有地を造成するとは何事か！」とねじ込まれてしまった。

「海洋センターは『県民の浜』の核となる施設でしたから、後には引けませんでした。町の将来を見据えた場合、工場などを誘致するよりも、ずっと大きな意味があると信じていたのです。この構想は、ぜったいに間違っていない。それが叶わないのなら、首をあげてもいいぐらいの覚悟がありました」

腹をくくって造成は強行突破したが、県内には3カ所のライバルが存在する。土地の問題が解決したからと言って、蒲刈町の申請が通るとは限らなかったのである。視察のときが勝負、そう考えた柴崎町長は秘策を講じた。

「フェリーに乗って蒲刈町に到着したとき、桟橋にずらりと消防服を着た楽隊が吹奏楽で出迎えてくれたので、あっと驚きました」

視察団の一員だった鈴木元理事は、同町に着いたときの第一印象をいまでも鮮明に覚えているという。桟橋に降り立つと、消防団 200 名が輪になって視察団を囲み、さらにその外側で 300 名の町民が輪になっていた。蒲刈町の人口は 3,000 人弱なので、実に町の 6 人に 1 人が出迎えてくれたのだった。

「熱心な若い町長を支えてやろうじゃないか」。柴崎町長を支持する、そんな愛情にも似た町民の心が桟橋で一つになっていたことを、視察団は感じないわけにはいかなかった。

「町のみなさんの輪のなかで陳情書を手渡されましたが、開いてみて、また驚いてしまいました。実にたくさんの団体、組織が、それぞれに海洋センターの必要性を細かく述べており、署名欄に至っては幼稚園児までがサインをしていたのです。こちらから、『ここまで熱心にしていただき、ありがとうございます』と言いたくなるような気持ちで、いっぱいになってしまいました」

最後の最後に、柴崎町長が思いを託した先は、ほかならぬ町民みんなの心だった。



【町長の強い意思と町民の熱意の結晶である海洋センター。艇庫・上屋付プール・体育館を備え、県民の浜の中核施設となっている。】

いろいろな方向性が見えてきた

柴崎町長、そして町民みんなが期待を寄せた海洋センターは、「県民の浜」の完成に先駆け、1984年にオープンした。

「まず、プールで泳げるとあって、町の子供たちが喜びましたね。海は夏しか泳げませんが、プールなら冬以外は大丈夫ですから、泳ぐことへの関心が高まりました。また、ビーチバレーが主婦の間で広がり、20年近く経ったいまでも盛んです」

柴崎町長自らも艇庫に出向いてカヌーに挑戦。最近、愛好者に勧められてシーカヤックに乗り始めてからは、さらに興味が沸いてきた。

「聞けば、艇庫が置かれている湾はシーカヤックに最適な水面だそうで、いまでは地元の子供たちを対象にしたシーカヤック教室が行われており、修学旅行で訪れる学生たちにも乗せるようになりました」

現在、研修・宿泊施設が整った「県民の浜」には年間30校ほどが修学旅行で訪れているほか、野外授業や体験学習の場としても県内外の多数の学校が利用している。今年の4月には、シーカヤックの大会を開催したところ、四国から漕いでやってきた参加者もいて、蒲刈町はシーカヤックのメッカとして知られつつある。

「その四国の参加者が語っていましたが、蒲刈町周辺の海は小島巡りができるので漕いでいて楽しいそうです。私も思いましたが、シーカヤックに乗って景色を眺めることだけで、かなり勉強になります。海岸や山の様子が、陸とは違った視線で観察できますからね。また、漕げるようになればなるほど自分に対する自信が沸いてきますし、愛好者になればなるほど環境への関心が高まっていくようです」



【穏やかな入り江の浜辺に建てられた、蒲刈町海洋センターの艇庫（赤い栈橋の奥）。シーカヤック愛好者から、ここは小島巡りが楽しめる格好のゲレンデだと喜ばれている】

シーカヤック愛好者たちがゴミを拾って帰る姿を、柴崎町長は何度となく目撃しており、これは環境問題を考える教材になると考えたという。

「これからは循環型社会になっていきます。そのモデルになろうと、『県民の浜』ではソーラー発電や廃棄物発電などにも取り組んでいます。蒲刈町に飛来する県鳥のアビは、瀬戸内海の環境問題を語るうえでのシンボルとなっていることから、環境学習にも力を入れていきたいですね」

澄んだ星空でなければ体験できない天体観測館や、古代土器製塩法体験施設で行われている塩づくりなども環境問題のテーマへとリンクすることができる。

「瀬戸内を舞台に、さまざまな環境問題を考えることができるので、そこが今後の狙いになってくると思います。マリンスポーツにしても、スポーツをすることで環境を考え学べるメニューを加えていく側面も必要だと思っています。とにかく、いろいろな施設が集中していますから、相互にリンクさせながら、今後たくさんの方の活用方法が生まれていくことでしょう。海にふれあい、空に学び、山に鍛える、個性的リゾート空間。それが、キャッチフレーズなのです」



【あらゆる施設が集められた蒲刈町「県民の浜」。家族連れのレジャーから修学旅行まで、さまざまなニーズに対応している】

【万葉集に歌われた一首を基に古代の製塩法を再現した、古代土器製塩法体験施設。地域の文化と自然を学べる場として人気が高い】



ちなみに、蒲刈町役場庁舎と「県民の浜」は、自治体庁舎では県内初となる国際規格 ISO14001 の認証を今年 4 月に取得。町ぐるみで循環型社会をめざしている。

「環境問題と言えば、高齢化社会への対応も今後の課題です。海洋センターがオープンして 20 年近くが経ちましたが、その間、社会はどんどん変化しているということです。B & G 財団さんも 30 周年を機にハードからソフトへ事業を転換しましたが、私たちの海洋センターでも施設のバリアフリー化をめざしながら、高齢者向けのスポーツプログラムを増やしていきたいと考えており、そうすると B & G 財団さんのご協力も必要になってきます」

シーズンになれば駐車場が不足するほど賑わう「県民の浜」。かつて首を賭けて事業を推し進めた柴崎町長の人気は衰えることを知らず、現在も首長として町民から慕われ続けている。



【蒲刈町役場は、木造建築の良さをふんだんに取り入れ親しみやすさを前面に出している。こうした庁舎建設などの際、B & G 財団が海洋センター建設時に行う検査方法（水平器の使用等）を町長が真似をして、建設業者に詳しいと感心されたというエピソードが残されている】